

## 大学における通訳・翻訳教育の意義

鳥飼玖美子<sup>1</sup> 西村友美<sup>2</sup> 稲生衣代<sup>3</sup> 中村幸子<sup>4</sup>

田辺希久子<sup>5</sup> 長沼美香子<sup>6</sup> 野原佳代子<sup>7</sup>

(<sup>1</sup>立教大学 <sup>2</sup>京都橘大学 <sup>3</sup>青山学院大学 <sup>4</sup>愛知学院大学

<sup>5</sup>神戸女学院大学 <sup>6</sup>元立教大学 <sup>7</sup>東京工業大学)

### 1. はじめに (鳥飼玖美子)

本稿は、2013年9月8日(日)日本通訳翻訳学会第14回年次大会にて開催された「通訳教育および指導法研究プロジェクト、翻訳研究育成プロジェクト合同シンポジウム：大学における通訳・翻訳教育の社会的意義」を再現し再構築したものである。

「訳す」という営為の社会文化的意義については近年、さまざまな研究で取り上げられるようになってきているが、通訳者翻訳者の育成もしくは通訳翻訳を教育に導入することの意義については検討が十分であるとは言い難い。

そこで本稿では「大学教育と通訳翻訳教育」という視座から、シンポジウムの構成に従い、まずは日本学術会議による「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準—言語・文学分野」で示されている「通訳・翻訳」を報告し、次に大学教育の現場から通訳・翻訳教育の実際を紹介する。

なお、本企画は河原清志会員(金城大学)の提案が出発点となり実現したものである。当初はシンポジウムだけの予定であったが、各パネリストの多岐にわたる発表を学会誌に残すことの意義は極めて大きいことから、全員の賛同を得て、ここにひとつの論考としてまとめるに至った。

### 2. 「日本学術会議『大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準—言語・文学分野』—大学における通訳翻訳教育の意義」(鳥飼玖美子)

政府への政策提言機関である日本学術会議では、大学設置審議会及び中央教育審議会からの要請を受け、数年にわたり大学教育の質保証について審議し、その一環として各分野における教育課程編成上の参照基準作成に取り組んだ。これは法的拘束力があるわけではないが、各大学がカリキュラム策定にあたり参照することで、学士教育の質を確保することを目指したものである。言語・文学分野でも2年ほどかけ、大学

---

TORIKAI Kumiko, NISHIMURA Tomomi, INO Kinuyo, NAKAMURA Sachiko, TANABE Kikuko, NAGANUMA Mikako, & NOHARA Kayoko, "Pedagogical Significance of Interpreting and Translation in Japanese Universities," *Interpreting and Translation Studies*, No.14, 2014. Pages 219-236. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

教育の中で言語と文学分野の何をどのように扱うべきかの議論を続け、2012年11月30日に「報告」を提出するに至った。本論考では、その中で、通訳翻訳に言及がなされている箇所を抜粋し紹介する。

---

## 通訳・翻訳

大学外国語教育にとって翻訳通訳を学ぶことには、根源的な意味がある。「訳す」という行為は、起点言語のテキストを理解し、解釈し、それを目標言語で表現することであり、すなわち言語間の異質性と格闘することにはかならない。つまり外国語教育において「訳す」という実践は、自らの言語と文化を省察しながら異なる文化を体験し複眼的思考を獲得することであり、世界の多様性を認識する手だてとなり得る。

したがって訳読も、外国語から日本語への機械的な逐語訳に終始することのないよう指導方法を工夫することで、異なる言語が内包する文化的特質や差異への気づきを学生に与える点で有用でもあれば、必要でもある。また、日本語から外国語への訳出の訓練は、発信型コミュニケーション能力を育成するうえにおいて重要な役割を果たす。

なお、ひとつの外国語に熟達したからといって通訳や翻訳ができるわけではなく、翻訳通訳の理論に関する研究を含めた専門教育を大学院レベルでおこなうことが求められるが、通訳翻訳を可能にするための言語力の基盤は、学部での外国語教育で形成することを目指したい。(p.4-5)

### (a) 職業生活上の意義

高度のコミュニケーション能力とリテラシーを必要とする職業は少なくない。いかなる業種で働くにせよ、文書の読解・作成、広報、顧客・利害関係者への説明等、コミュニケーション能力とリテラシーを要求される課題に、言語・文学は有用である。

言語・文化等における差異を認めた上で相互理解を図ろうとする国際化が、同時に進展しつつある今日の世界と日本において、国際共通語と外国語の高度の運用能力を要求される職業・業務は飛躍的に増大している。特に、国際化が一部の限られた人々の問題や関心ではなく社会全体の課題となり多文化多言語状況が現実となっている今日、日本在住の外国人にとって共通語である日本語の教育を充実させることは喫緊の課題である。さらに言語と文化の多様性を確保するための多言語での通訳と翻訳は、その必要性が認識されると共に、単なる当該外国語の修得以上のより高度な専門能力が求められている。言語の特性を熟知しリテラシーを身に付けた言語・文学を学んだ者は将来、その面で有用な働きをすることが期待される。(p.10-11 下線は筆者による)

---

補足的な説明として付言すると、学術会議による提案は「大学教育」における「言

語」と「文学」の位置づけを明確にすることが主たる狙いであるので、通訳と翻訳についてここまで言及したことは異例である。しかも委員会から出された原案は日本学術会議として公表するにふさわしい内容であるか査読にかけられ、大幅かつ幾度にもわたる修正を経て最終的に「学術会議」の報告／提言／勧告としての公表が認められる。その点を考えれば、「通訳翻訳」に関する箇所が修正も異論も全くなく査読を通ったということは特筆に値しよう。

「報告」では、「国際共通語としての英語」と英米の「地域語としての英語」を峻別して扱うべきだという画期的な提案もしているが、英語教育に関しては、それ以外に、「訳す」ことの重要性を強調することで現行の「英語は英語で教える」という訳読排除の英語教育を暗に批判する提言もしていることになる。但し、従来型の文法訳読を勧めているのではなく、「外国語から日本語への機械的な逐語訳に終始することのないよう指導方法を工夫すること」と釘を刺し、その上で、訳すことは「異なる言語が内包する文化的特質や差異への気づきを学生に与える点で有用でもあれば、必要でもある」としている。

さらに昨今重視されている「発信型コミュニケーション能力」を念頭に置き、日本語から英語の通訳を推奨している。

学部の外国語教育だけで通訳や翻訳ができるような人材を育てることは難しいという現実をふまえ、「ひとつの外国語に熟達したからといって通訳や翻訳ができるわけではなく、翻訳通訳の理論に関する研究を含めた専門教育を大学院レベルでおこなうことが求められる」と明言した上で、「参照基準」は学部が対象であることから、「通訳翻訳を可能にするための言語力の基盤は、学部での外国語教育で形成することを目指したい」としている。

日本学術会議による「参照基準」で「通訳翻訳教育」が取り上げられたのは、通訳や翻訳が大学教育の一部として公的に認知されたことを意味する。政府による「グローバル人材育成」推進政策では、本来の意味での異文化コミュニケーションの重要性が全く捨象されているが、その欠陥を大学教育の現場にあって通訳翻訳教育が正すことを期待するものである。

---

## 論考 1： 大学における通訳学生と他専攻生とのコラボレーション事業の試み（西村友美）

### 1. はじめに

本稿では、通訳を学ぶ学生達が同じ大学の他学部である看護学部の学生達とともに、ボランティアで通訳をするコラボレーション事業の報告をおこなう。

## 2. 通訳コラボレーション事業の概要

本事業は、筆者が勤務する大学の看護学部が毎年主催する国際交流事業の中に位置づけられる下部事業である。専門の異なる2つの学部の学生が、小グループで協同学習・協働しながら、国際交流事業という社会に実存するひとつの目的のためにボランティアで通訳任務に当たる。そのことから「通訳コラボレーション事業」と名付けられている。事業の発案者はその目的を、(1)他学部生と学習や交流を行うことにより、それぞれの学修の専門性を理解する、(2)異業種を志す学生と交流することによって、お互いの考え方や特性を知る、(3)お互いの専門性を生かした協同について実践をとおして学習し考察する、という3点においた。

具体的な活動は、(1)フォーラム基調講演者の出迎えなどのアテンド、(2)観光案内、(3)懇親会や医療機関視察時の通訳、(4)関連資料の翻訳、などである。そのほか、プロの通訳者による国際会議場での同時通訳やセミナーでの逐次通訳を見学したり、学内教員と来日研究者が打ち合わせする場へ出席したり、関係機関への訪問時に同席したりする機会を提供される。

参加者への初回ガイダンス後、のべ約30時間の学習会が設けられており、両学部学生が共同で事前準備学習をする。内容は、医療・看護の専門用語を学習する、講師が事前に送ってきた資料を翻訳する、模擬観光ガイドをする、などに亘る。参加者は授業外に実施される本事業にボランティアで2、3ヶ月の期間携わることになるが、毎年十数名が応募してくる。

## 3. 本事業がもたらす協同学習の可能性

ヴィゴツキー(2001)は、ZDP(最接近発達領域)という概念を用い、他者との協働や相互作用が個人の発達につながると指摘しているが、通訳コラボレーション事業にはZDPでの学びの機会が効果的に存在する。たとえば、参加者は事前準備段階で自分の専門ではない多くの新しい知識を習得することを求められるが、グループの他の構成員に援助されたり、彼らを模倣することで、それらをあまり苦に思わず、むしろ良い刺激と感じながら段階的に習得していく。また、国際交流事業の関係者と相互交渉をおこないながら実在する問題解決に当たる任務も、学生達が処理できるよう指導者が適宜、援助・選別する。参加者は無理のない範囲で、やりがいを感じながら、自らを発達させられるのである。

また、本事業は活動の目的に協同学習を謳っているが、これはJohnson, Johnson & Holubec(1993)が提唱した協同学習を念頭に置いたものに他ならない。Johnsonらは、学習者が少人数集団で仲間とともに活動することにより、互いの学びを最大限に高め合えるという。さらに、その集団は、(1)互恵的な相互依存性、(2)対面的な相互交渉、(3)個人としての責任、(4)社会的スキルや小グループ運営スキル、(5)集団の改善手続き、の各要素を含む必要があると言う。本事業は、能力や特性の異なる者がグループ

を結成し、社会に実存する目的に向かって活動するという面で、これらの要素を満たしながら協同学習を実践するものといえる。

#### 4. 参加学生の反応

事後アンケートから事業の目的が達成されていること、かつ参加者が高い自己効力感を得ていることがわかる。以下は2012年度に実施したアンケート回答の要約である（紙面の都合上、看護学部をA学部、英語コミュニケーション学科をB学科と表記する）。

##### 【看護学部（A学部）学生】

英語の勉強だけでなく他学部の学生や先生方と関わることが、自分にとってとてもいい刺激になった。／何事もチャレンジしてみないと始まらないと思えた。／普段英語に触れる機会がなかなかないので不安思ったが、B学科の学生や先生方のサポート・指導でフォーラム当日は大きな不安もなく迎えることができた。／A学部の学生とB学科の学生のそれぞれの強みが生かせる学習が行われていた。／A学部生の持つ医療的な知識とB学科の学生が持つ英語の知識を融合できるように学習し、それぞれにない知識はフォローし合って情報や知識を共有できた。／フォーラム当日は講師と同時通訳者の打ち合わせに同席し、普段目にすることが出来ない同時通訳ブースの見学ができてよかった。／フォーラム講師とその家族も含めた懇親会に参加し、自分のできる英語でコミュニケーションをとれた。／学習会では英語の文を読んだり、英語に関する話も聞くこともでき、とてもためになった。

##### 【英語コミュニケーション学科（B学科）学生】

自分が学んでいる通訳学がいかなるものか、体験から実感でき、看護学の奥深さを知ることができてとても良い機会だった。／イレギュラーな場で英語を通じて何かを体験することは、新たな発見ができるとともに、自分自身へのモチベーションアップにもつながるのだと気づくことができた。／英語や看護に対する興味がより一層湧いた。／初めて通訳者が実際に通訳を行う通訳ブースを見学させてもらい、生の通訳を聴き、プロの通訳は想像を超える技術だと再認識した。／数少ない大切な機会なので、これからも時間が許すかぎり、積極的に参加して自分なりに多くの収穫物を得たいと思っている。

#### 5. おわりに

この事業を体験した通訳を学ぶ学生たちは、そのあとの就職活動にも積極的に取り組んでいる。医療分野への関心を眼覚めさせたことにより、医療関係企業への進路を決めた例もある。通常授業で学習したことが、このような課外活動で実際に生かされることにより、学びは確実に深化していると考えられる。

##### 【参考文献】

ヴィゴツキー, L. S、柴田義松訳 (2001) 『新訳版・思考と言語』新読書社

Johnson, D. W., Johnson, R.T., & Holubec, E. J. (1993). *Circles of learning: Cooperation in the classroom (4th ed.)*. Edina, MN: Interaction Book Company.

---

## 論考 2: グローバル人材の育成と大学の通訳教育 (稲生衣代)

### 1. はじめに

大学が今取り組むべき課題として頻繁に取り上げられるキーワードの一つが「グローバル人材」である。文部科学省がグローバル社会で活躍できる人材の育成を目指す拠点大学を選定し、その後もグローバル人材に関するシンポジウムが各地で開催され、グローバルな視点を持つ学生の育成の必要性が企業からも伝えられている。

### 2. グローバル人材と通訳教育

グローバル人材の定義は様ではないが、「グローバル人材育成戦略」(2012)によると「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の3要素がグローバル人材に含まれる。また、「これからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質としては、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等を挙げることができる」と、これから社会に出る学生に求められる資質についても明らかにしている。

次にグローバル人材育成を意識した通訳指導の一例について論じる。

### 3. 通訳プロジェクト

実践的な授業が主流の通訳者養成機関と異なり、大学の授業では、理論と実践のバランスが求められ、通訳学の基本書や論文などを取り扱うクラスと同時に実践的な内容のクラスが設けられている。通訳者養成機関では個人が主体的にプロを目指しながらスキル習得に取り組むスタイルが主流であるが、大学では協同学習を導入している通訳プロジェクトに取り組むことがある。テクノロジー、エンターテインメント、デザインといった幅広い内容の数多くのスピーチをおさめた TED のウェブサイトや米国大統領選挙などを取り上げる通訳プロジェクトにこれまで筆者の授業で学生に取り組んでもらってきた。通訳プロジェクトは、①テーマを選択、②調査、③資料・モデル訳の作成、④グループ発表、⑤通訳パフォーマンス、⑥訳出確認などといったプロセスで進めていく。

これまで協同学習における肯定的相互関係や個人の責任の明確化といった要素について Johnson, Johnson & Holubec (1984) や McCafferty, Jacobs & DaSilva Iddings (2006)

などで論じられてきた。通訳プロジェクトでは、本来は一人で取り組む通訳に関わる準備過程に協同学習を導入することによって、学生たちが建設的な相互依存をはぐくみ、グループ内での責任感を培い、主体的に行動するように求めている。プロジェクトでは、コミュニケーション能力と課題達成のために必要な専門スキルを体験的に習得することが可能になり、全体的な語学力や訳出スキルの向上のみならず、学習意欲の向上や問題解決能力、調査力の向上など、さまざまな肯定的副次効果が得られる。学生に主体的に取り組ませ、諸プロセスを協同学習で進めることで、グローバル人材に求められている「幅広い教養」の習得、「課題発見・解決能力」の向上、「チームワーク」の向上、といった資質の習得へ一定程度の貢献が可能であると考え（稲生2012）。

#### 4. 終わりに

2014年1月にスイスのダボス会議での会見で日本の安倍首相発言が波紋を広げ、『日中関係 第1次大戦前の英独』首相発言と英で報道 ダボス会議 誤解招き政府釈明（日本経済新聞 2014.1.24）、「英紙の安倍首相発言報道 通訳の補足説明で誤解!？」（産経新聞 2014.1.25）、「英独発言、通訳を注意 外務省」（朝日新聞 2014.2.1）、「同時通訳の育成要求 首相発言誤訳『日本の国防左右 自民部会』」（産経新聞 2014.2.1）と各紙で一連の報道が続いた。会見の訳出の際、何が起きたのか今後検証する必要があると考える。とはいえ、通訳者が国際社会において重要な役割を果たしていることが確認された。大学における通訳教育では先ず異文化コミュニケーション能力を備えた社会に貢献できる人材育成を目標とする。加えて、将来、グローバル社会に対応可能なプロ通訳者を輩出するための道筋をつけるべきであろう。

#### 【参考文献】

- 稲生衣代 (2012)「通訳入門クラス：グローバルな視点から」青山学院大学文学部『紀要』第54号 59-70
- 首相官邸「グローバル人材育成戦略」(2012)  
[www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf) (2012.8.7 取得)
- Johnson, D. W., Johnson, R., & Holubec, E. J. (1984). *Cooperation in the classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCafferty, S.G., Jacobs, G., & DaSilva Iddings, A. C. (2006). *Cooperative Learning and Teaching in the Second Language Classrooms*. New York: Cambridge University Press.

---

### 論考3： 学生模擬国際会議の成果と訳すことの意義—Direct Method を越えて（中村幸子）

#### 1. はじめに

現在の日本の英語教育界は、コミュニカティブ・アプローチの教育観に基づくコミュニケーション重視型（Communicative Language Teaching=CLT）による単一言語（英語）のみの教育が全盛である。そんな中、21世紀に入り、英語教育にも訳の復権を唱える動きが見られるようになってきている（例えば Block 2003、Cook 2010 など）。通訳翻訳の授業は、母語である日本語の価値を維持しつつ他言語・他文化の多様性を認識する手段ととらえることができる。本稿では学期末に通訳学習の締めくくりとして行われた学生模擬国際会議の成果について紹介し、通訳訓練を通じて最終的にどのような能力が養われるのかその一端を示したい。

#### 2. 学生模擬国際会議とは

ある特定の国際的問題に関して、学習者が3人1組に分かれそれぞれのグループがいくつかの国家の代表としてその問題に関する自国の立場からスピーチを行う。3人が自分たちの国の紹介、現状の問題点、解決策の提案などを分担する。1人がスピーチをしている間、残りの2名は通訳ブースに入り、1人が同通を行い、もう1人はサポート役に回る。全員が1/3ずつローテーションで英語スピーチ部分と英日同時通訳部分を担当するという形式で行った。2012年度は3.11から2年目を迎えたこともあり、「原子力発電とエネルギー政策」のテーマで、アメリカ、日本、中国、ドイツに分かれて全部で4チームが各国の政策をアピールした。

##### 2.1 鍛えられるスキル

この活動で複数のスキルを鍛えることができる。例えば、第一に、稲生ほか（2011）が推奨するテーマ・ベーストリサーチ力の強化が挙げられる。模擬国際会議で取り上げたテーマはその年に話題となったテーマから指導教員が選んでいる。2010年度は生物多様性条約、2011年度はTPP、2012年度は2校の大学の指導教員が相談の上、原子力政策を取り上げた。学習者は決められたテーマと割り当てられた国の現状や政策を調べその国の代表者になりきってスピーチを行う。スピーチ作成においては、自分たちの調査に基づき英文を作成し、お互いに何度も議論して見直しをし合うことで英文構成力や資料提示力、さらには論理的思考力を鍛え、感覚的な文章ではなく証拠に基づく根拠ある主張をしようとする姿勢を育むことができる。同通においては、チームメンバーの原稿を事前に訳出準備をする過程で、頭ごなし訳を含めた訳の工夫を行うことでオンライン処理の能力を高めることができる。またスピーチをしっかりと聞きな



がらタイミング良く訳出するため、自然とアテンティブ・リスニングを行うようになる。サポート役をするときは、英語を聴きながらチームメイトの訳を聴き、困っている場合にすぐに訳を差し出すことが求められ、やはりアテンティブ・リスニングの力が鍛えられる。同時に他者との協業意識も芽生えてくる。

## 2.2 期待される効果

この活動の最大の効果としては、人に伝える力が養われることである。また当然のことながらその問題に関する代表国の取り組みへの理解が深まり、日本を取り巻く世界への視野が広まることも挙げられる。英日通訳を行うことで美しい話し言葉の日本語への意識が生まれることも大きな効果である。これらは副次的な効果と思われがちであるが、今後厳しい就職活動を経て社会へ出ていく学生たちにとっては、場にふさわしいレジスターの使い分けを体得するための絶好の実践の場でもある。この利点はもっとアピールされるべきであろう。

## 2.3 参加者のフィードバック

2012年度に行った「原子力発電とエネルギー政策」に関する模擬国際会議では、観覧中の参加者に各チームのプレゼンテーションについて感想を書かせた。どの学生も各国の発表内容に関して細かく記録しており、各国の政策を比較することもできていた。例えば、「アメリカが福島事故のことを自国の立場で冷静に分析していること、リスクやマイナス面を認識したうえで原発利用を考えていることがわかった」、「中国にとって自国の発展のために多くのエネルギーが必要であることから原子力に賛成し安全対策も施していることがわかった」、「ドイツはまず最初に首相のことばをそのまま使うことでインパクトがあった」、「中国の発電方法に太陽光発電がグラフになかった点には驚いた」など、単なる感覚的な感想ではなく、具体的な記述が寄せられた。このことから通訳内容が十分伝わっていたことだけでなく、自分も同じテーマでスピーチを作成したことが内容のより深い理解と具体性のある感想につながったことがうかがわれる。また、同時通訳パフォーマンスそのものについて「聴きやすい声で通訳していたのが印象的」、「訳し始めるタイミング、訳出速度、日本語の選び方がとてもよかった」、「訳が遅れてもうまく次の文で追い付き、スピードを整えていた点がよかった」など、自分が同時通訳を経験したからこそ気付く分かりやすい訳出のための様々な工夫に言及できたようである。

## 3. まとめ

最初は1つの大学で通訳学習の成果発表の場としてスタートした学生模擬国際会議も3年目は参加校が2校になり、今後はさらに増える見込みである。教員側は最初に具体的で今日的なテーマを選定し学生に与え、資料調査の方法を指導するものの、その後は当日までほとんど学習者が主体的に準備を行っている。通訳の授業を履修して

いる学生数は比較的多いため、事前に予選を行わざるを得ないが、どの学生もスピーチと同時通訳の両方を体験できる貴重な機会であり、発表当日は他学の学生との交流の中で客観的に自分のパフォーマンスを見つめ直す機会でもある。

今後の課題も見つかっている。「国際会議」である以上質疑応答があるのだが、その部分はまったくぶつつけとなるため、学生からはあまり突っ込んだ質問がされないことが多い。理想的には、発表者とフロアが活発に議論したり、国同士の丁々発止のやりとりがあり、その部分のぶつつけ同通もある程度訳出できるようになれば、この模擬国際会議ももっと臨場感にあふれ現実味を帯びてくると考えられる。今後は学生の反応を見ながらよりチャレンジングな指導法も視野に入れていく必要もあろう。

#### 【参考文献】

- Block, D. (2003). *The Social Turn in Second Language Acquisition*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Cook, G. (2010). *Translation in Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- 斉藤兆史・北和丈(訳)(2012)『英語教育と「訳」の効用』研究社
- 稲生衣代・河原清志・溝口良子・中村幸子・西村友美・関口智子・新崎隆子・田中深雪(2010)「日本における通訳教育の課題と展望：日本通訳翻訳学会・通訳教育分科会 2009-2010 年度プロジェクトより」『通訳翻訳研究』第10号: 259-278. 日本通訳翻訳学会

---

#### 論考4： 質問紙から見る翻訳授業の効果（田辺希久子）

現在の翻訳教育は実践志向とされるものの、学部レベルで実践に通用するスキルを養成することは不可能であり、グローバル化の影響もあって殆どの大学では、学部レベルの翻訳教育の目標は「リテラシーの養成」や「コミュニケーション力の養成」とされている。本稿では2年にわたる翻訳授業受講者の調査（Tanabe & Minamitsu: 2010, 2012）を踏まえ、最新の2012年度の調査に焦点をあてて紹介する。

##### 1. 調査の概要

2010年、2011年の調査は「英語教育としての翻訳教育」に焦点をあて、受講者が翻訳（者）に対して良いイメージを持ちながら、それを目指そうとしないという動機付けのギャップを明らかにした。しかし冒頭に述べたように、翻訳教育の目標は現在、リテラシーやコミュニケーション力の養成に移ってきていて、教育目標に英語スキルの向上を前提とした動機づけの調査は意味を失っていると言える。実際、翻訳授業での著者自身の感触から、大学生の間に「憧れの対象としての翻訳者」のイメージが薄れ、受講生の翻訳への向き合い方に変化が感じられてきた。そこで2012年度は社会全

体や教える側の方針変化や、「翻訳者への憧れ」のような社会的要因に左右されない、「翻訳行為」がもたらす、より基本的な効果に着目した。

### 1.1 調査方法

今回の調査では質問内容は過去のを踏襲したが、一方で集めた回答に対してキーワード抽出ソフトを使用した。この種のソフトは用語の一般性を確率的に導き出し、出現頻度と組み合わせてキーワードを抽出する。過去の調査が教育的な目的をもっていたのに対し、キーワード抽出という手法によって調査者の予断を越えた回答パターンを見出すことを目指した。

### 1.2 調査対象

調査期間は2012年度の初頭(4月)および年度末(1月)。対象はA大学2年生(年度初47人、年度末34人)、B大学3年生(年度初34人、年度末5人)、ただし分析はA大学を主体とし、B大学の調査は補足的に用いた。質問項目は、①翻訳のイメージ、②翻訳授業への期待または感想、③翻訳は将来どう役立つかの3項目である。

対象とした翻訳授業は、両校ともさまざまなジャンルのテキスト(文字テキストのみでマルチメディア素材は含まない)を、読者志向で背景知識やコミュニケーション状況を意識しながら訳出する演習である。

解析方法はキーワード抽出ソフト Term & Phrase Extractor を使用し、①キーワード長2字以上、②抽出結果から英数字を除外しない/名詞と複合語以外のものを除外しない、を選択し、③キーフレーズ優先で解析を行った。

### 1.3 分析

以下は抽出されたキーワードの分析から観察されたパターンである。

(1) 年初における「翻訳授業への期待」への回答字数が、年度末における「翻訳授業の感想」の回答字数の3倍近く増え、「翻訳」というキーワードも年末のほうが出現頻度が高くなっていた。「翻訳には何十通りの訳し方がある」「場に応じた翻訳」など、年度末になると「翻訳とは何か」という概念的な見方が生まれたと言える。

(2) 年初の期待に比べ、年度末の感想で「日本語」というキーワードの順位が上昇した。また「英語」「日本語」というキーワードの文脈を見ると、「日本語」は「自然な」「正しい」「らしい」、「英語」は「向き合うようになった」「無視しなくなった」など、年初より年度末のほうが記述の具体性が増している。

(3) 期待/感想ではともにボキャブラリー(単語)への言及に根強いものがあつた。しかし年初で頻出した「ニュアンス」が年度末では「読み手」という言葉に変わるなど、言語からコミュニケーションに関心が移っていることがわかる。

(4) 年初の将来像のデータでは「外国」「仕事」「自分」(の意見)、「コミュニケーション」など、型通りのキーワードが頻出しているが、年度末になると「英語」や「日

本語」の割合は減って表現が多様になる。(年初の「将来」に関する質問で1回きり出現する項目が75%だったのに対し、年末は83%となっており、表現が多様になっていることがわかる。)

(5) 年初の翻訳に対するイメージには「映画」への言及が多いが(両校とも「洋書」を上回る)、年度末には「映画」に関する言及は現れなくなる。

## 2. まとめ

A大学もB大学も「コミュニケーションとしての翻訳」を理解させることに力を入れており、上述「1.3分析」の(1)および(3)の観察結果は指導者の意図を反映したものと見える。それだけ学習成果が上がっているとも見えるが、本稿の目的はより深いところにある学習者主体の心の動きである。その点で興味深いのは(2)と(4)の観察である。これらの項目からわかるのは、翻訳の授業を受ける前は観念的で型にはまっていた言葉というものに対するイメージ、自分自身の将来像へのイメージが、より具体的で多様なものになっているということである。

今後の課題として、今回の調査で明らかになった、翻訳を体験した学習者のイメージの「多様性」の中身をより絞り込んで、調査方法や質問項目にもさらなる検討を加えることで、翻訳という行為がもたらす心の動きをより明らかにしていきたい。

### 【参考文献】

- Tanabe, K. & Minamitsu, Y. (2010). Translation Learning in Japanese Colleges and Universities: From Students' Point of View. *FIT 6th Asian Translators' Forum Proceedings*, 590-600.
- Tanabe, K. & Minamitsu, Y. (2012). Bridging the Motivational Gap: Research on translation classes in Japan. *Conference Papers of 16th International Conference on Interpreting and Translation Teaching: Experiences, Creativity, and Strategies*.
- .....

## 論考5：日本の大学における「記述的翻訳教育」へむけて(長沼美香子)

本稿では「記述的翻訳教育」(descriptive translation education)をキーワードとして、学部レベルの翻訳教育について、日本学術会議の「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準一言語・文学分野」(以下、「参照基準」と略す。「参照基準」本体は鳥飼の論考を参照)における提言内容と関連させながら考察する。

翻訳者は高度な専門職であり、プロフェッショナルとしての「翻訳者(養成のための)訓練」(translator training)は翻訳学においても重要な研究分野である。ホームズ(J. Holmes)の提起した「翻訳学の見取図」を確認しておこう(図1)。

図 1 : Holmes' basic 'map' of Translation Studies (Toury, 1995, p. 10)

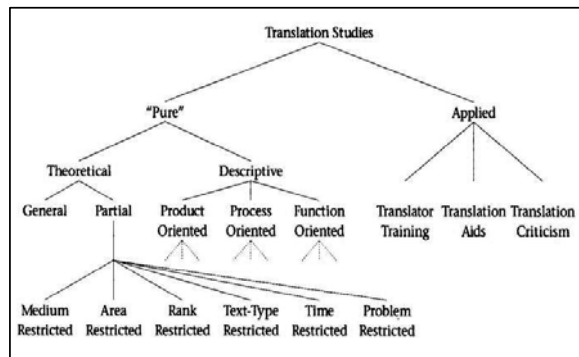


図 1 によれば、翻訳者訓練は右側の応用部門にあり、規定的 (prescriptive) な志向性を持つ。ただし、大学での翻訳教育 (translation education) を考えると、翻訳者の養成に限定するよりも、翻訳学全体を視野に入れた方が可能性は広がる。図の左側に位置する純粋部門は、さらに「理論」と「記述」に分れるが、学部レベルでは理論的な学術研究を考慮しながら、記述的 (descriptive) な志向性を持つ翻訳教育が適していると思われる。

これは、旧翻訳研究分科会の翻訳教育調査プロジェクト・チームが 2007 年に実施した調査で明らかになった実態とも整合する。本調査の詳細は、「わが国の大学・大学院における翻訳教育の実態調査概要」「アンケートにみる日本の大学翻訳教育の現状」(いずれも『通訳研究』第 8 号) とともに、JAITS のアーカイブに「集計結果の生データ」も公開しているので参照されたい (下記 URL)。

[http://jaits.jp.org/home/Kaishi\\_Archive/Jaits8-on-index.html](http://jaits.jp.org/home/Kaishi_Archive/Jaits8-on-index.html)

さて、「参照基準」では、「大学外国語教育にとって通訳翻訳を学ぶことには、根源的な意味がある」として、大学教育と通訳翻訳についての画期的な提言を行っている。ここでは特に 2 つの点に絞って、記述的翻訳教育の実践例を考えてみたい。

まず、「自らの言語と文化を省察しながら異なる文化を体験し複眼的思考を獲得すること」という点については、学部教育の総仕上げとも言える卒業論文に注目したい。筆者がこれまでに実際に指導した卒業論文の題目には、例えば次のようなものがあった (紙幅の都合で一部のみランダムに抜粋)。

「ファンタジー小説と和語」「『源氏物語』の英訳比較」「落語から RAKUGO へ：外国人の笑わせ方」「絵本翻訳とオノマトペ」「ネット広告の翻訳」「ディズニーの翻案と翻訳」「英語に訳した日本料理」「石井桃子の翻訳作品」「新聞社説の翻訳」「多文化共生社会と医療通訳」「読者が求める翻訳とは」「地域社会の多言語サービス」「SF 小説の翻訳造語と振り仮名」「マンガとアニメの国際化」「必然的な誤訳」「日本と英国における茶文化の翻訳」「翻訳家としての村上春樹と柴

田元幸「女ことば・男ことばと翻訳」『万葉集』の枕詞をどう英訳するか」「翻訳され続けるアリス」「振り仮名の役割：J-POPの歌詞を中心に」など

翻訳（通訳も含む）を卒業論文のテーマにすると、日本語や日本文化と格闘せざるを得なくなる。まさに「自らの言語と文化を省察しながら」の「複眼的思考」の涵養が期待できよう。また卒論指導では、純粋部門（図1）のメタ言語も最大限に活用したい。

次に、「参照基準」では「訳読」について、「機械的な逐語訳に終始することのないよう指導方法を工夫」としているので、実践的な工夫例を探ってみよう。

ST: “I think it’s going to rain.”

TT①英文和訳: 「私は雨が降ると思います」

TT②順送り訳: 「私の考えでは、雨になるでしょう」

TT③モダリティを考慮した翻訳の一例: 「たぶん雨かな」

TT①は、従来の学校英語では模範解答となる。TT②は通訳訓練で活用されるオンライン処理をした順送りの訳であり、これを契機に情報構造などを説明することもできる。TT③は、I think をモダリティとして捉えた訳例であり、ここで日本語のモダリティについて話し合える。さらに「きっと雨ね」「おそらく雨じゃ」などと比較すれば、女ことばや役割語へと話題は広がる。原文に he said や she said があつたとしても、発話者が特定できる日本語では必要ないことにも納得。また TT②と TT③の違いは、ST が発話された場合にプロソディーの差異として現象することに気がつくかもしれない。ちなみに Google 翻訳による機械翻訳でも、「私は~~それが~~雨が雨になるだろうと思います」と後編集すれば、TT①程度の品質は実現できる。「機械的な逐語訳」ならば機械に任せればよいのであり、翻訳行為では英文和訳からの脱却が要請される。

以上のように、「訳す」という体験を通して ST と TT のペアを記述するなかで、興味深い議論は尽きないし、言語や文化について主体的に考える絶好の機会となる。

グローバル化と IT 革命が（特に実務）翻訳市場を席卷している今だからこそ、学部レベルでは翻訳技法に限定せずに、理論研究に基づいた柔軟でしなやかな翻訳力を培いたい。記述的翻訳教育が目指すところは、現場が求める即戦力を養成する場である専門学校での翻訳者訓練とは異なる。（ただし実践的訓練を排除するものではなく、むしろ包含すると考えればよい。）自動車の運転に譬えれば、オートマ車（AT: Automatic Transmission）とマニュアル車（MT: Manual Transmission）のような関係か。現在、日本での市場シェアは圧倒的に AT 仕様が優位であるが、いつどこで何故ギアチェンジが必要なのかという MT 的思考があれば、どんなオフロードにも挑戦できるのだ。

#### 【参考文献】

Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.

## 論考 6: 理工系人材育成における翻訳教育の意義と可能性——科学技術コミュニケーション次世代へ（野原佳代子）

### 1. はじめに

翻訳の理論と実践教育は、理工系のグローバル人材教育としてどのように役立つか。日本で早急に育成が期待されているグローバル人材教育は、国や文化を超えて科学技術やビジネスを複眼的な視点でとらえ伝達できる人材を育て、内向き志向の学生を国際的なキャリアパスに向かわせること等が目的とされる。翻訳を学ぶことは、情報コンテンツと背景文化を他者の立場からとらえ直すことでもあり、翻訳教育の果たす役割は大きい。

### 2. 産業界から求められるコミュニケーション力

理工系人材が専門力に加え産業界から強く求められる能力として、英語力、コミュニケーション力、協働力、リーダーシップ力、柔軟性等がある。とくにコミュニケーション力は社会での業務遂行にも自己実現にも不可欠だが、対人コミュニケーションに対し苦手意識を持つ理工系学生は多い。アンケート調査によると、対面のコミュニケーションに漠然とした不安を持つ学生は非常に多い（東京工業大学 2008-2011）。理工系の勉強において曖昧性や多義性をできるだけ排除し物事を明確に定義する習慣が身につけているためか、言語による意思伝達においても「意味情報は固定されており自動的に変換可能」という認識が強い。これが「文脈に依存するコミュニケーションは非科学的かつ不正確でありよくない」という思い込みにもつながる。そうした認識を揺らし、発話の意味はダイナミックに変動することを学ばせたい。

### 3. 科学技術コミュニケーション実践力

理工系人材にコミュニケーション力が求められるもう1つの背景に、科学技術コミュニケーションの必要性がある。これは科学技術についての専門家－非専門家間の情報共有や対話を指す。遺伝子組み換え、地球温暖化、代替エネルギー問題、IPS 細胞等、科学技術は倫理的にも社会的にも多様な議論を生む。サイエンスカフェ、市民講座など対話活動は増えているが、問題はそれを誰が担うかである。理工系人材は大学院修了者が多く比較的高い専門知を持つが、それを社会に活かす技術には必ずしも秀でていない。対話の必要性が高まる中、科学技術コミュニケーションが日本文化に根づくのか注目されている（Norton & Nohara 2009）。

コミュニケーションは連携活動の基盤であり、翻訳は目的に応じたコミュニケーション調整である。ヤコブソンが翻訳を言語間翻訳・言語内翻訳・記号間翻訳に分けて

整理したのは周知の通りだが (Jacobson 1931)、科学技術コミュニケーションを、科学や技術を文脈に応じて翻訳し直す行為として教えることには効果がある。

#### 4. 翻訳教育試行例

情報を別の文脈において価値ある情報に変換させ、適切な媒体を利用して表現する力はどうすれば身につくか。

A 背後に理論的枠組みを持った実技演習

B 変換の重要性をメタ認識させる理論導入

の2種類が考えられる。東工大で試行中の教育事例としては、

A:

- ・雑誌記事や文学作品を言語間翻訳する実習
- ・科技分野の専門的文章を一般向け、あるいは子供向けに言語内翻訳する実習
- ・海外インターンシップ (科学博物館等で業務体験)
- ・サイエンスカフェの企画と実践
- ・技術を記号間翻訳し製品をデザインするコンセプト・デザイン実習

B:

- ・講義「情報社会とコミュニケーション」(翻訳学・言語学の理論導入と演習)
- ・ワークショップ「実践ローカリゼーション」(ソフトウェア翻訳とローカリゼーションを体験)

等がある。

事後インタビューや担当者によるインターンシップ評価等の調査によると、理工系分野学生が対象の場合、とくにB群による効果が顕著である。コミュニケーションのような人間の行為についても、メカニズムを論理的に把握したいという理工系に顕著な傾向があり、十分な理屈を提供してやることで、自分はどうすべきか、という気づきにもつながっていると考えられる。

#### 5. まとめ

グローバルな高度科学技術人材には専門力に加え、異文化を理解しながら協働し課題解決に向けてリーダーシップを発揮する力が求められ、それを日本の文化・土壌に合わせてどう育てていくかが問われている。また社会が求める科学技術コミュニケーションを実践できる人材も必要である。柔軟性のある豊かなコミュニケーション力養成において翻訳教育は効果が高い。翻訳通訳分野の研究者養成・実務家教育が注目される中、理工系グローバル人材教育としての応用についても、さらに検討していきたいと考える。

#### 【参考文献】

ローマン・ヤコブソン (1973 [1931]) 『一般言語学』 みすず書房



Norton, M. & Nohara, K. (2009). Science Cafés. Cross-cultural Adaptation and Educational Applications, *Journal of Science Communication*, 8-4.

\*\*\*

本稿は、日本通訳翻訳学会年次大会（2013年9月8日、神田外国語大学）で行われたシンポジウム「大学における通訳・翻訳教育の社会的意義」での発表に基づいた論考である。このシンポジウムは同学会の通訳教育指導法研究プロジェクトおよび翻訳研究育成プロジェクトの合同で行われた。通訳教育から3名、翻訳教育から3名、いずれも大学において通訳・翻訳の指導にあたっている学会員が発表を行った。

発表内容をめぐる文脈情報として、日本における通訳・翻訳教育、またその背後にある英語教育の伝統を挙げるべきだろう。特に翻訳は訓読方式に基づく英文和訳の伝統のもとでエリート主義や受験とも結びついてきたが、現在の通訳・翻訳教育はそうした世間一般の通訳・翻訳に対するイメージを払拭するとともに、母語と外国語の両方を扱う点で、昨今のコミュニケーション重視のモノリンガル志向の教育とも一線を画さざるを得ない。それゆえ「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準一言語・文学分野」における提言に見るような、新たな教育哲学・教育倫理が切望されていると言える。

シンポジウムで浮かび上がった共通項をキーワードとしてまとめると3つあげられる。1点目は、「協同学習」あるいは「協業」である。教員の適切な介入による「協同学習」を取り入れることで難しい実践も取り組みやすくなり、プロセス自体が学びになるなど、学部生の指導に非常に有効であることが論じられた。さらに協業の場がクラス内から学部や大学を越えた場にまで発展しているという新しい動きも認められる。2点目は、通訳・翻訳教育は教養課程・理系・文系を問わずに実践可能な「幅広い言語教育」であるという点である。通訳・翻訳教育に携わる教員は、指導する学生のレベルや関心に応じて様々な工夫を凝らした授業を行っており、結果的に社会貢献にも繋がっている点が、プロ通訳養成を主眼とする民間の通訳スクールとの明らかな違いでもある。3点目は、通訳・翻訳教育がこれまで論じられてきた英語力の涵養以上の潜在性を秘めた「人材育成」教育に発展する可能性がある点である。大学というアカデミズムの場で、学際性の高い通訳・翻訳理論の成果を踏まえた、新たな通訳・翻訳教育の位置付けが確立されつつあることがうかがわれる。

今回のシンポジウムをきっかけに、こうした指導者たちの多様な取り組みが具体的実践として結集・理論化され、それらが通訳・翻訳教育に広く活用可能な教案や教材に具体化されることが望まれる。さらに通訳・翻訳教育に携わる者が、日本の教育制度においてユニークな発言力を持った存在として一層活発に発信して行くことが望まれる。

.....  
【著者紹介】

鳥飼 玖美子 (TORIKAI, Kumiko) 立教大学特任教授、順天堂大学客員教授、国立国語研究所客員教授、サウサンプトン大学大学院人文学研究科博士課程修了 (Ph.D.)。研究分野は通訳翻訳学、言語コミュニケーション論、英語教育学。

西村 友美 (NISHIMURA, Tomomi) 京都橘大学人間発達学部教授。M.S.ED., Concentration in TESOL (テンプル大学)。研究分野は通訳教育、英語教育学等。

稲生 衣代 (INO, Kinuyo) 青山学院大学文学部准教授。タフツ大学フレッチャー・スクール法律外交大学院修了。研究分野は通訳教育、映像翻訳、放送ジャーナリズムにおける通訳論。

中村 幸子 (NAKAMURA, Sachiko) 愛知学院大学文学部教授。MSc in Teaching English for Specific Purposes (Aston University, U.K.)。研究分野は通訳教育、コーパス言語学、法廷通訳言語分析等。

田辺 希久子 (TANABE, Kikuko) 神戸女学院大学文学部教授。青山学院大学国際政治経済研究科修了。研究分野は翻訳教育、翻訳者のアイデンティティ等。

長沼 美香子 (NAGANUMA, Mikako) 元立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任准教授。通訳と翻訳の理論研究・実践・教育に取り組む。

野原 佳代子 (NOHARA, Kayoko) 東京工業大学留学生センター／社会理工学研究科教授。オックスフォード大学クイーンズ・コレッジ大学院博士課程修了。研究分野は翻訳理論、言語学、サイエンスコミュニケーション。

.....